

特集 「国語の力」を育てる II —読む力—

私の読書体験

二十一世紀の「読み」

日本国語教育学会会長 倉澤 栄吉

左に挙げたのは、有名私立中の入試問題の一部——
次の 1 ～ 5 の意味を表す慣用句を答えなさい。
慣用句の始めにくる漢字は示してあります。

(例) 見るにたえないほどみすばらしい。「見」
答え…「見る影もない」

1 こわい存在である様子。「泣」(以下略)

最初の 1 の問題から私は困惑した。掲載新聞(二〇〇三年三月三十一日 読売新聞 夕刊)には解答例もあったが、正答を見る前に、小学校六年生になったつもりで、この有名私立中の入試にに応じてみようとしたのだが……。一生懸命に

考えたが、「泣」で始まる「恐い存在」が読み取れない。2に移った。これも分からず、1～5の五問のうち、できたのは二問だけ。ある研究会(国語主任級の先生たち十数人)で試してもらったが、正答の平均点は五分の三・二であった。有名私立の入試問題文を読み解く大人の力の不足を思い知らされた。が、この問題文の「慣用句」とは?「始めにくる漢字」とは?漢字でなく「泣く」「打つ」「当たる」などの動作を意味する語を出せば、?は生じにくい。だから「問題文」の表現の仕方に問題があるのだ。

先の事例は「読みの力」の中の「入試文の読解力」に限られた特例である。では、最近の「読(よ)み」の実際は、読書体験は?

私は、読書家といわれるほどの者ではない。しかし、昨年从今年にかけての「日本語ブーム」に対応するには音をおげた。日本語と名のつく刊行本はなるべく手に入れようとして三十冊以上も購入した。これらをむろん隅から隅まで読んだわけではない。積ん読の部に入る。齋藤孝の本が火付け役になったから、この人の書いた本は十冊近く手に入れたが、「声に出して読みたい日本語」(草思社)を完読しただけ。それも例文名文は題目だけ。『週刊文春』の連載などはむしろ無視しようと思えたのであった。

『からだを読む』(養老孟司) ちくま新書)は、常に「毒にも薬にもならない。」とあったが、すらすら分り、体の構

造と組織が平明に図示されて納得した。「読む」とはこのよつな「分かり易さへの体験」と感じた。また、新潮社の月刊誌『波』の表紙で、藤沢周平の自筆に出会ったのは昨年十一月である。そこで『たそがれ清兵衛』の題名は『うつむき清兵衛』が初案であったことを発見。興味をそそられた(これについては、日本国語教育学会の機関誌『月刊国語教育研究』の四月号に書いた)。最近の映画の中では、『たそがれ清兵衛』が好評であったが、私は小泉堯史監督の『阿弥陀堂だより』を観て、自然をよむ 体験をした。信州の山々がこれほどの美しさで迫ってくることに感動し、さらに北林谷栄のおばあさん役に魅了された。この映画のキャスト紹介や主人公たちのメッセージを読んで、映画のイメージがより切実になったのである。そして、私は原作者南木佳士(なづきよし)の(文春文庫)を読むに至ったのだ。文献の連鎖性という本能めいたものが、人間を読者にする。文献から文献へ、情報(テレビ・映画その他の文化財)から文字へ。(北林谷栄から『おばあちゃんの家』のキム・ウルブンへ)。その意味では、音読、朗読、暗誦などの最近の流行も関連拡散の風潮としての一つの「流れ」と見ることが出来る。『新日本語の現場』(橋本五郎監修 読売新聞 新日本語企画班 中公新書ラクレ)もこの流れに沿っている。

私たちの仲間、津田成一氏に「読むことからよむことへ」という発想がある。読む・よむは読書であり情報処理であ

る。よみ人知らずに代表される表現・賦詠(創作)でもある。意義が広い。二十一世紀はこの広がり許さなければならぬ。津田成一(敬称略)は、よみの対象として、文章・情報・記号・課題・将来・時間・状況・自然・内面・くらしなどを挙げた。文章・記号 には、行間・羅針盤・計器・楽譜・点字等々が含まれる。情報 の中には、挿絵・インターネット・パンフレット・ナビゲーター等々十九の対象が入っている。そして、占(くらし) には家相・人相・手相 これらの項目を数え上げると総計七十に及ぶ。おそらく視点を変えていけば、百以上にもなるだろう。

読みの力は内面的である。読み手の心の中でゆらめいている。動いている。止まったりする。「主題」などといわれて作品では大事にされすぎてきたが、文意は固定的では絶対でない。津田が挙げている「内面をよむ」の十三項目には、顔色・表情・気持ち、行動・裏・腹・人・長所をよむ。音声・自己・家風・音・味をよむなどが数えあげられている。こう並んでは、あまりに羅列的であり、目標がむやみに広がりすぎていってしまうかもしれない。こんなに欲ばらなくてもいいではないか。小学校では、もっと基礎的な読み書きをばんを、と批判する人もいるだろう。「流行よりも不易を」という思想が今のマスコミである。が、流行から不易が生まれることもある。(不易からしか流行は生まれえないという一面もあるのだ)読書と読解とは、盾の両面であるべきだろう。